

## 序 言

シンポジウム企画者

村田雄二郎（東洋文庫研究員・東京大学教授）

公益財団法人東洋文庫では超域アジア研究部門の中に現代中国研究班を設け、今日グローバルなパワーとなりつつある現代中国の動態を、政治・経済・国際関係・文化などの領域から総合的に考究する活動を展開してきた。本シンポジウムは、現代中国研究班の研究成果を対外発信するとともに、さらなる研究の高みを目指す一階梯となるものである。

近年、現代（当代）中国研究の分野では、檔案（アーカイブ）の公開・整理が、程度の差はあれ、各国・各地域で急速に進みつつある。こうした現状を踏まえ、現代（当代）中国研究の現状と今後の方向性を探るべく、国内外から第一線で活躍する研究者を招き、基調報告と特別講演、および「戦後東アジアの国際関係と檔案（アーカイブ）」、「大衆・集団・国家」、「檔案資料から見る“中国”の内と外」の3セッションを設けて、報告と討論を行うこととした。各報告では、各種資料の現存・整理・公開の状況が具体的に紹介されるとともに、アーカイブを使った最先端の研究の現場が実践的に示される。

タイトルに掲げた「アーカイブの内と外」とは、檔案とそれ以外の文書群、中国語文献と外文資料、中国研究と中国「外部」「周辺」の研究、文字資料と非文字資料、文献研究とフィールドワーク等の幾層もの対比を念頭に置いている。また、檔案や行政文書などの「ハード」な歴史資料と記憶やイメージなどの「ソフト」な遺産との関係を問うことも視野に入れている。さらに、各国・各地域で蓄積された檔案の精査を通じて、当代中国研究における横の地域比較を試み、同時代的な問題群の発見を導くことも、本シンポジウムの趣旨の一つである。

## 基調報告「アーカイブ・記録・記憶」

### 民間史料と中国現代史研究の人文志向——華東師範大学現代文献史料センター収蔵品についての所見

張 濟順（華東師範大学教授）

民間史料は、まさに発展しつつある中国現代史研究の中で、ますますその価値と潜在的な重要性を示しつつある。すでに多くの大学や研究機関、学者個人が、民間史料の収集・発掘・整理に尽力しており、華東師範大学東方歴史研究基金会現代文献史料センター（以下「センター」と略す）はその代表である。

「センター」は2014年10月に成立したが、「何もないところから始まった」わけではなく、華東師範大学中国現代史センターと冷戦国際史センターが長年積み上げてきた堅実な基盤があり、所蔵する民間史料と冷戦期の各国の檔案の数量・規模はすでに相当のものとなっている。

「センター」が所蔵する民間史料は約5,400巻あまりで、150万ページを越える。現在すでに目録が完成し、電子データベースに入力した民間史料は10万件近い。

2009年から現在まで、華東師範大学中国現代史センターが編集し、東方出版センターから出版した『中国当代民間史料集刊』は11種17冊におよび、さらに2種がまもなく刊行される。

